

子供の目で見つめた戦争

福岡市西区 西堀 実

昭和16年12月8日、小1だった私は登校すると、全校生徒集合の朝礼で校長先生から戦争の開始と生徒の心構えについて訓話を受けた。『これは大変なことになった!』と不安でなかったもので、帰宅して兄の本棚から世界地理附図や教科書等を借りて調べたあげく、『米国は日本の数倍の国力がある!、日本は絶対負ける!、負けると判っている戦争を何で始めるのか!、大人は皆バカだ!』と心の中で叫んだ。

私は母より4歳の頃から文字を習っていたので、新聞や兄姉の教科書等をむさぼり読んで世の中の動きをおぼろげながら判断できていた。戦争も最初の頃は真珠湾攻撃、マレー半島快進撃、シンガポール陥落、英戦艦プリンスオブウェールズ撃沈等威勢が良かったが、次第に進撃の速度が鈍ると共に、予想していたとおりに苦戦するようになった。

毎年12月8日は大詔奉戴日とかで神社参拝……『神様に頼んでも願い事のかなうのは完全にゼロなのに大人は変な事を強制するなあ……』とつぶやいていた。また、3月10日は陸軍記念日とかで小国民として行軍があった。

小2の3月10日は大雪だったが、薄着で手袋は不可、素足にわらぞうりで10km程離れた標高約300mの鏡山を目指した。寒さにこごえ、雪に足を取られながら、やっとたどりついた山頂!。だが山小屋の中に入れるのは女生徒と先生だけ!。私達男子生徒は雪の降る外で立ったまま、梅干入りの握り飯を1個、ブルブル振るえる手で歯をカチカチ鳴らしながらパクついた。ほんとに死にそうだった。

戦争は次第に激化し、やがて小さな胸で心配していたとおりに、生徒の父や兄の戦死が通知されるようになり、その都度私達はその家の前で遺骨迎えに参列した。……白木の箱を握りしめるその手はふるえていたが、軍神の母や妻は泣くことさえ許されなかった!。

そして、『戦争を始める一部の人間やその子弟が戦に行かないのは不公平だ!。命令と宣伝に従って徴兵され他国へ攻めて行き、多数の人々を殺傷し、おまけにその一部の人間のために敵の弾に当たって死ぬなんて絶対にいやだ!。こんな馬鹿な事が世の中にあってたまるか!』と激しい憤りを覚えた。

ある日、叔父(父の弟)がフィリピンで戦死したとの連絡があり、父は必死に涙をこらえ沈痛な表情でひどく悲しんでいた。

やがて、覚悟していたとおりに父にも召集令状が来た!……。幸い内地勤務で私達はほっとした。一度面会に行った母が帰って来て語ったところでは、爆撃や機銃掃射がひどく、また上官の制裁が厳しいとのことだった。

私達は狭い庭に防空壕を掘り、空襲警報が鳴る度に潜り込んでいたが、唐津は観光都市で大きな軍需工場が無いので爆弾を落とさない!。よく調べているなあと思心していた。

夏休みのある日、真昼頃、幅500m程の松浦川で友達数人で泳ぎ、疲れて川の中州の砂地の上にあお向けに寝ころんで上空を見つめていた時、急に空襲警報が鳴り、やがてB29の編隊が近づいて来た。ちょうど私達のへその真上にさしかかったが、『爆弾は落とさない』と信じ、皆じっと編隊の通過を見守っていた。……今もあのB29の銀色の美しい姿とキーンという音（日本の飛行機はブーンであった）は脳裏に焼きついている。

空襲警報とB29をナメ切っていたある日、またサイレン！……。しかし今度は飛行機の音が違う！。……屋根に上って見渡したところ、あの艦載機グラマンが数機！、……約2km離れた港に停泊中の船舶を狙っての急降下機銃掃射！。……私は屋根の上から文字どおり、固唾をのんで見守っていた。……後にも先にも実弾の飛ぶ戦闘を見たのはこれだけだった。

戦争がますます激しくなって来たある夜、警戒警報が何かで外へ出て見ると、はるか東の方の空が赤くなり、それが次第に大きくなって行く……。その空の下は約50km離れた福岡市であることがすぐ判断できた。……翌日の新聞等からこれがいわゆる福岡大空襲で、あの夜の不気味な赤い空も強く印象に残っている。

米軍機の飛来度数、戦死公報の増大、沖縄の状況、食糧不足等から子供にも敗戦の近いのが判った。……間もなく小4の夏、新聞一面に「広島に新型爆弾」…続いて長崎にも…更に日ソ不可侵条約を破り、ソ連参戦！。

そしてあの8月15日正午、隣家のラジオの前に多勢の人が集り玉音放送に耳を傾けた。……『耐え難きを耐え、忍び難きを忍び……』……突然、ある青年が「ウォーツ」と叫び声を発してワアワア泣きじゃくった……。

戦争が終って数日後のある夕方、友達数人と松浦川べりの小屋の屋根に上って涼んでいたところ、北の方から日本の戦闘機が1機飛んで来て私達の頭上をグルグル回りだした。私達は一齐に手を振って応えていたが、急にその戦闘機は機首を下へ向けると、きりもみ状態で川の浅瀬へ突っ込んで来た！。……やがて憲兵や警官が10数名やって来て、死亡した若い2人の飛行士を担架で運んで行ったが、大人達の話によると、敗戦を嘆き、自決したらしいとのことであった。

翌朝、警官の張りめぐらした縄をくぐって操縦席をのぞいたところ、計器盤に鶏卵のからみたいな顔面の骨の一部と肉片が点々とこびりついているのを見て、私はひどいショックを受けた。それは生々しい物を見たからではなく、終戦になって帰りを待ちわびている父や母や、弟や妹の期待に悩みに悩んだ末応えられず、自決の道を選んだ2人の青年の心の中を思いやったからであった……。

戦後間もない8月末頃か、「米軍の軍艦が多数唐津沖に来ている。満州（現在、中国東北地方）でソ連軍は日本人を皆殺しにして両腕に10個程腕時計をしていた。米軍もそうするだろう……」という噂がパッと拡がった。私はまさかと思ったが唐津市街方面から衣類等を積んだリヤカーが続々と田舎の方角へ向い、その数は次第に増えて、我が家も知人を頼って田舎へ向った。

家から2km程進んだ時、何と向うから川棚(佐世保の南)の軍需工場へ学徒動員に行っていた姉が近づいて来るではないか!。私達はびっくり!、姉も驚いてかけ寄って来ると、「何で逃げよっとね!、アメリカ兵は何も変なことしてないとよ!。家に戻ろう!」と言ったので、私達はしぶしぶ逆戻りしだした。なんせ人々の流れと逆なので、皆キョロキョロ見つめて何やら叫んですれ違う人もいた。

姉はリヤカーを引くのを手伝いながら、長崎の原爆で焼けただれた負傷者や遺体が貨車やトラックで続々と川棚を通過して北へ運ばれて行った有様を涙ながらに語り続けた……。

やがて父も復員したが、戦後の食糧難はひどく、糠、草、イナゴ、ヘビまで食べた。

私達は憲法の基本精神を守り、二度とあの悲惨な戦争を子孫に体験させてはならない!!